

〈研究ノート〉

在宅で暮らす元気老年者がもっている死に対する思い － 死生学に関心がある1事例の検討 －

高岡 哲子、伊藤 美和、深澤 圭子

Thoughts of the healthy elderly living at home toward their own death － Reviewing the case of a subject who is interested in thanatology －

Tetsuko TAKAOKA, Miwa ITO, Keiko FUKAZAWA

名寄市立大学保健福祉学部看護学科

The objective of this study of healthy elderly persons living at home is to clarify their thoughts toward their own death. The study was conducted through an interview with a cooperative male who was in his seventies and interested in thanatology. From the interview, five categories (thoughts on life tasks, thoughts on life after death, experience of discussing death, implication of learning about death, and important points learned about death), and 19 sub-categories were extracted. The results revealed that, when the elderly think about their own death, it is necessary for them to think about both their own death and life tasks, and discussing death among the elderly makes it possible to know about another person's experience and increases opportunities to learn more about death. It was also discovered that it does not matter whether a world after death exists in reality; rather, each person needs to actively consider life after death in the discussion. Therefore, it was suggested that nurses could encourage the elderly to have such discussions and to approach them with a wait-and-see attitude regarding the details to be discussed.

本研究は、在宅で暮らす元気老年者の、死に対する思いを明らかにすることを目的として行った。協力者は、70歳代の男性で、死生学に関心のある1事例であった。協力者に対するインタビューデータから《人生課題に対する考え (3)》《死後の生に対する考え (3)》《死について話し合う経験 (4)》《死に対する学習の意義 (2)》《死を学習する際のポイント (6)》の5つのカテゴリーと19個のサブカテゴリーが抽出された。これらのことから、老年者が死を考えると、死と自らの人生課題について考える必要があること、老年者同士が死について話し合いをすることで他者の経験がわかり学習の機会が広がること、死後の世界が実際に存在するかどうかは問題ではなく、死後の生について話しあう中で自ら考えることが重要であることがわかった。よって看護師は導入のための方向づけを行い、話し合いの内容については、見守る姿勢が必要であることが示唆された。

キーワード：老年者、死生観、看護学

I. 緒言

1980年代頃から、デーケン¹⁾は「死の準備教育」に関連した書物を発行し、次に「生と死を考える会」を設立した。同様に日野原ら²⁾が、「死生学(1988年)」を、柏木³⁾が「死を学ぶ(1995年)」を、さらに山本⁴⁾が「死生学のすすめ(1992年)」を出版したりと、1980年代後半から1990年代にかけて死をテーマとした様々な活動が行われていた。

平成14年(2002年)の看護白書⁵⁾では、国民医療費を抑制するための方策として、看護・介護サービスを中心とした看護職の主体的・自律的システムを整備することの必要性を説明した上で“このような医療提供体制の改革に関する議論の中で、今、看護が特に目を向けて積極的に変革していく必要のある領域が、「看取り」という人の「死」に対する看護である”と述べていた。このように、1980年代後半からの国民に対する死への意識改革とも思える活動の広がりや、医療費抑制などの時代背景が医療・看護・介護の動向に影響し、2004年以降の看護領域における死生観関連の文献増加に大きく貢献したものと考え⁶⁾。

老年者の死生観に関する先行研究を概観すると、田中ら⁷⁾は、死について考えると不安・恐怖と結びつくことを報告していた。これは、デーケン⁸⁾が説明していた、“人間はだれでも心の底に死に対する恐怖や不安を抱いている”と通じる。不安や恐怖は、誰しも持ち合わせる感情である。しかし、これが過度になることで、日常生活に支障をきたすうつ状態へと陥っていく危険性がある。だからこそ人間は、不安や恐怖と結びつく死を、できるだけ遠ざけておきたいと思うだろう。しかし、老年期は配偶者や友人の死、自らの身体機能の低下などの喪失を体験しやすい時期である。さらに、病気に罹患するなどの体験から、自らの死を身近に感じやすい時期でもある。このようなことから、老年期においては、否が応にも自らの死について考える機会が多くなる。このような状況で老年者自身も、死について前もって準備する必要性があることを認識していることが報告されていた⁹⁾。またデーケン¹⁾は、死について身近な問題として考えることは“生と死の意義を探求し、自覚をもって自己と他者の死に備えての心構えを習得することができるし、また必要でもある”と述べていた。つまり老年者の場合、自らの死について考え、人生全体の意義を明らかにすることは、人生の総括を行なう上で大変重要なことである。

さらに文献検討の結果から、老年者は「安らかな死」に対する願望を持っていることが明らかにされていた¹⁰⁾。しかし、死を迎える場所については、田中ら⁷⁾が在宅死を選んだ老年者が多かったと報告する一方で、平川ら¹¹⁾は罹患している疾患などによって終末期を迎える場所が変化することを報告していた。また木内ら¹²⁾は、終末期の迎え方の希望は、死ぬときのことに限らず、現在のことから、死後のことに及んでおり、高齢者の終末期の捉え方は様々であると報告していた。このように老年者の死生観に関する研究は、多く行われていたが、研究の切り口は、「死の迎え方」「死を迎える場所」などであり、老年者自身が死そのものをどのように考えているのかを明確にする研究は見当たらなかった。これらのことから、老年者自身の死に対する思いを質的に明らかにする必要があると考えた。老年者と一言で表現しても、年齢差、障がいの程度などによって様々であり一概には対象を限定することはできない。よって老年者の死生観を明らかにする研究の導入として、本研究では、在宅で暮らす元気老年者を対象として、死に対する思いを質的に明らかにすることを目的として行った。

II. 研究方法

1. 協力者

生活障がいがない在宅老年者(65歳以上)で、死について話したいと思っていて研究協力が得られる方である。選択条件として、うつ病や認知症の既往がないことと、2人以上で暮らしていることとする。

2. 協力者との出会い

地域にある老人会の代表者に依頼し、集団に対して研究の主旨などを説明する機会を設けてもらえるように話す。この際、研究内容が記載してある資料を代表者宛に郵送する。代表者に内容を確認しても

らい問題がなければ、集団に対して説明する機会を作ってもらおう。この説明会では、研究者の連絡先を書き、協力が得られる方から、連絡をもらうようにする。連絡をもらって初めて、研究者は、協力者となる方と直接話をするようになる。そして、待ち合わせ場所や時間を設定してインタビューを行うことにする。

3. データ収集方法

データ収集は、非構成的インタビューにて行う。時間は1時間以内／1回とし、聞き取りきれなかった場合は複数回とする。場所や時間は、協力者の都合に合わせて。話し始めは、「あなたが死についてどのように思っているかを自由にお話ください。」とする。

基本属性に関するデータ収集は、質問紙にて、性別、年齢、死別体験などを書いてもらう。

4. 分析方法

分析方法は以下の通りである。

- ①録音したデータから逐語録を作成し、文脈を整理する。
- ②文脈単位を大切にしながら切片化を行い、記録単位とする。
- ③各協力者が語ったことを、意味内容の類似性に合わせて分類しカテゴリー化する。
- ④抽出されたカテゴリーについて、分析する。
- ⑤分析は、老年看護学領域に属する者で行なう。
- ⑥得られた結果は、妥当性を高めるために協力者に確認する。

5. 倫理的配慮

本研究は、名寄市立大学における倫理委員会で承認を受けて行うことを前提とする。

1) 協力者の同意

協力者を募る際は、個人にではなく集団に対して行う。そして、協力を申し出た老年者には、研究の主旨を説明して、書面にて同意を得る。インタビューが数回にわたる場合、その都度協力の意志を確認してから行うようにする。

2) 匿名性と守秘性

協力者のプライバシーを守るため、個人が特定できるような表現は、研究のどの段階においても行わない。

3) 身体的・心理的侵襲に対する配慮

身体的侵襲を与える危険性は少ない調査であると考えますが、インタビューによる協力者の疲労には配慮する。本研究は、元気老年者を協力者とすること、また、語りたい者のみを協力者とするため心理的侵襲は少ないと考える。しかし自らの心理状況に目が向き、気分に影響を与えることも考えられるため、家族に対しても研究の概要を説明し、協力者の気分に変化が見られた場合や心配なことがあった時は、研究者と連絡が取れるようにするなど配慮する。

Ⅲ. 結果

1. 協力者の紹介

1) 生活歴

協力者は70歳代後半の男性で、4人兄弟の3番目として農家の家に生まれた。結婚後は2人の子どもを養育した。現在は、子どもが自立したため妻と二人で暮らしている。

協力者は、青年期から宗教に興味を持ち、キリスト教の通信教育や神道の寒修行をおこなったり、宗教の関連図書を読んだり、現在に至るまで学習を進めてきた。しかし、特定の宗教団体に所属したことはなく、宗教に対しては、もっとよい宗教があるかもしれないと、追求している状態であった。

死別体験としては、自分の姉、両親、妻の兄弟と両親であった。

2) 職歴

協力者は教育関係の仕事をしていたが、現在は無職である。

3) 現在の生活

協力者は家庭菜園を行う傍ら、地域にある文芸雑誌やその他の雑誌に投稿するなどの執筆活動をおこなっていた。文章を書くこと、読書、碁を打つことなどを趣味として、大変忙しい毎日を送っている。これらの趣味は、家族の集まりや行事よりも優先されるが、妻や友人の受診のために車で送迎するなど、家庭的な一面も見られた。

2. 協力者の「死に対する思い」

面接時間は約75分であった。得られた記録単位は289で、そのうち、死に関連しない15の記録単位をのぞいた274をデータとして扱った。分析の結果、5つの《カテゴリー（サブカテゴリー数）》と19の〈サブカテゴリー（記録単位数）〉が抽出された。

《人生課題に対する考え（4）》は〈人生には課題がある（25）〉〈人生課題に取り組む（8）〉〈人生課題に気づけないことがある（5）〉〈人生課題に取り組むと効果がある（4）〉によって構成されていた。〈人生には課題がある（25）〉は「だから、病気っていうものをまったく悪いもの、まったくマイナスなものとしてのイメージではなく、病気になりきるって言うのかな。病気になりきることによってその意味を見つけ出すと。」などから抽出された。〈人生課題に取り組む（8）〉は「災難に遭うときには災難に遭ったほうがいいんだ、これがトータルとして災難を逃れる一番妙法だという考え方は、相当あるんだな。」などから抽出された。〈人生課題に気づけないことがある（5）〉は「（人生課題は）うっかりするって言うかな、気付かないで過ごしてしまう恐れがあるわけさ。」などによって抽出された。〈人生課題に取り組むと効果がある（4）〉は「課題に敢然と立ち向かって解決したら愉快になると。その課題から逃げて迂回したら不愉快になるということを使うわけだ。」などから抽出された。

《死後の生に対する考え（3）》は〈死後の生への期待と確信（59）〉〈現世で終結（9）〉〈死後の生へのまよい（2）〉によって構成されていた。〈死後の生への期待と確信（59）〉は、「（自分の考えとして）人間は死によって終わる存在じゃないという考え方、これはきちんと持っているな。」などから抽出された。〈現世で終結（9）〉は、「ううん、人間死んで灰と煙になって終わる存在だという確信を持っている人がいると思うんだ、世の中に。そういう人たちは、どうかな、あともう何年かで死ななきゃならないというときに、どういう考えで生きるのか、ちょっと自分はそういう考えをしていないから想像できないけれども、何て言うかな、生きている間は好きなことやったほうが良いという考えになるのかもしれないし。ううん、ちょっと想像つかないな、その辺りは。」などから抽出された。〈死後の生へのまよい（2）〉は「（いろいろ調べて人間は、）大体死んで終わる存在じゃないということは分かったんだけど、その先ちょっとまだ半信半疑な面があったんだな。」などから抽出された。

《死について話し合う経験（4）》は〈老年者は死について話す場面がある（14）〉〈同じ体験であっても受け手によって違う（4）〉〈死を学習するきっかけがある（2）〉〈死に対する恐怖心を持つことがある（2）〉によって構成されていた。〈老年者は死について話す場面がある（14）〉は、「法事のたびに。お経に書いてあることはこういうことが書いてあるとか、ああいうことが書いてあるとかって言って、そういう機会には恵まれるんでないかな、みんな。遭遇するんじゃないかな。」などから抽出された。〈同じ体験であっても受け手によって違う（4）〉は、「苦勞した人間か悟りを開いた人間でないと、ちょっとその心境は（お経の内容や偉人の経験など）分からないって言うかな。ちょっと誤解してしまう。」などから抽出された。〈死を学習するきっかけがある（2）〉は、「ただ、それが坊主の説教だということまで聞き流してしまうか、あるいは、ほんとにそういうことがあるんだろうかと、事実、そういうことをお寺の住職や何かに聞きに行ったりして興味を持って尋ねることになるだろう、次に。」などから抽出された。〈死に対する恐怖心を持つことがある（2）〉は、「人間だれでも子供のときには死ぬことをすごく恐れる。それから、若いときとか中年になってもそういう気持ちは残るんでないかな。」などから抽出された。

《死に対する学習の意義（2）》は〈死に対する学習は効果がある（33）〉〈死後の生を確信すると人生に期待が持てる（8）〉によって構成されていた。〈死に対する学習は効果がある（33）〉は、「ところ

が、今は死生学とか生と死を考える会なんていうのが普及してきてさ、ちょっとものの考え方が変わったと思うんだけど、死を考える、死を研究するということは、寿命が詰まるんじゃないじゃなくて実は長生きをすることにつながるんだよな、意外なことに。うん。死というものを知ることによる安心感というのかな。死によって終わる存在じゃないことに気付くことによる安心感、安定感というか。それによって、充実した人生、死ぬまでの人生を生きれると。そういうこともあるんでないかな、やっぱり。うん。確かそういうことはあると思う。」などから抽出された。〈死後の生を確信すると人生に期待が持てる(8)〉は、「だから、これによって終わりでないということになれば、今やっていること、例えば趣味とか読書とかいろいろものを書くとかということ、これで終わりでないんだから、努力のしがいがあるというのかな、生きがいがあるというのかそういうのにつながるんじゃないかな、やっぱり。」などから抽出された。

《死を学習する際のポイント(6)》は〈死に対する学習内容の検討(60)〉〈アドバイザーが必要である(10)〉〈一般的な死生観(9)〉〈宗教に関係なく行う(7)〉〈同世代同士の共有(7)〉〈ガイドブックがあるとよい(5)〉によって構成されていた。〈死に対する学習内容の検討(60)〉は「それだから、例えば、テレビで死者の書を読む場面を映し出したときに、坊さんが家に入ってくるわけだ。そして、その次に坊さんが何て言ったかと言うと、今この人は普段からこの死者の書を読んでいたかとかいうようなことを聞くわけさ。」などから抽出された。〈アドバイザーが必要である(10)〉は、「だけれども、そういう課題を与えられるとか、実はこの死というものを研究することは実は大事なことなんだというように、何か示唆を与えられたら、考え出すということはあるんでないかな。考えてああそうか、そういうこともあるなど。」などから抽出された。〈一般的な死生観(9)〉は、「(死について考える)チャンスは何回かあって、それを体験するわけさ。それをどれだけ、何て言うかな、真剣に受け止めて、お互いにどれだけ話し合って深めるか、ということなんだけれども、どちらかと言ったら、死ぬのは全部他人で、自分は死なない存在だと思って生きているわけだから、なかなか自分の問題としてとらえるということは、普通はできないんじゃないかな。」などから抽出された。〈宗教に関係なく行う(7)〉は、「宗教を持たなくても。あるいは、何宗でも。(関係ない)」などから抽出された。〈同世代同士の共有(7)〉は、「・・・年寄りには長い間人生経験の中でいろいろ経験しているから、体験談を話し合えば、一人二人いろいろなことを知っている者がいてさ、考えるヒントになるものを、話題を提供できる人が出てくると思うよ、確かに。」などから抽出された。〈ガイドブックがあるとよい(5)〉は、「で、そういうとき(死について話をするとき)に、それは一体どういうことなのかということ、事例集というのか体験談というか、そういうものがあればいいわけだ。」などから抽出された。

表1 本協力者がもっていた死に対する思い

カテゴリー	サブカテゴリー	記録単位数
人生課題に対する考え	人生には課題がある	25
	人生課題に取り組む	8
	人生課題に気づけないことがある	5
	人生課題に取り組むと効果がある	4
死後の生に対する考え	死後の生への期待と確信	59
	現世で終結	9
	死後の生へのまよい	2
死について話し合う経験	老年者は死について話す場面がある	14
	同じ体験であっても受け手によって違う	4
	死を学習するきっかけがある	3
	死に対する恐怖心を持つことがある	2
	死に対する学習は効果がある	33
死に対する学習の意義	死後の生を確信すると人生に期待が持てる	8
	死に対する学習内容の検討	60
死を学習する際のポイント	アドバイザーが必要である	10
	一般的な死生観	9
	宗教に関係なく行う	7
	同世代同士の共有	7
	ガイドブックがあるとよい	5

IV. 考察

1. 人生の課題と死との関連

今回のインタビューでは、死に対する思いを非構造的に自由に語ってもらった。死について語ってもらったため、抽出されたカテゴリーは、死に関連したカテゴリーが多かった。この中で、《人生課題に対する考え》として〈人生には課題がある〉〈人生課題に取り組む〉〈人生課題に気づけないことがある〉〈人生課題に取り組むと効果がある〉が抽出されていた。このことから本協力者は、死と人生課題とを関連づけて考えていることがわかる。サブカテゴリーとして〈人生課題がある〉〈人生課題に取り組む〉〈人生課題に取り組むと効果がある〉は抽出されたが、結果で判断するようなサブカテゴリーは抽出されなかった。つまり、本協力者は人生課題に取り組んだ結果ではなく、取り組むプロセスが重要なことを訴えていたことがわかる。本協力者は自らの人生課題を具体的に語ることはしなかった。さらに《人生課題に対する考え》で語られた内容は、病気になることだったり、災難にあうことだったり、直接死に関連していたわけではない。つまり、本協力者は、死について考えるときには死についてのみ考えるのではなく、自らの人生課題についても考える必要があることを示唆していた。

2. 老年者が経験する死について語るきっかけ

奥¹³⁾は、60歳以上の高齢者を対象とした研究結果として、自己の死を考えるきっかけになった出来事は「人の死」61.6%、「自分の健康」43.5%、「戦争体験」36.5%、「家族の病気」33.2%などであったと

報告していた。本協力者は、老年者が《死について話し合う経験》があることを示していた。これは、ただ単に〈老年者は死について話す場面がある〉だけではなく、これらの経験が〈死を学習するきっかけがある〉につながっていると考えていた。つまり、老年者は、様々な場面で死を考える出来事があることが推測された。本協力者においても「葬式など」で話す機会があると話されていることから、「人の死」によって、自らの死を考える機会になり、これが死に関する学習につながったものとする。しかし、〈同じ体験であっても受け手によって違う〉ことが抽出されたように、個人の経験や文化によって同じ出来事でも個人によって、学習の機会になる場合と、ならない場合がある。よって、自らの経験をもとに、老年者同士が話し合いをすることで他者の経験がわかり、学習の機会が広がる可能性を秘めていると考える。

死に対する学習となると、学生以外は、各宗教団体で行われる説法などがある。しかし、本協力者は《死を学習する際のポイント》として〈宗教に関係なく行う〉が抽出されたように、特定の宗教団体ごとに行われなくてもよいことを示していた。これは、無宗教の老年者の学習する機会につながる。

本協力者の語りから抽出された《死後の生に対する考え》の〈死後の生への期待と確信〉や《死に対する学習の意義》に含まれる〈死後の生を確信すると人生に期待がもてる〉からもわかるように、老年者自身が死後の生に対して「確信を持つ」ことが重要だとされていた。死後の生に対しては、様々な意見があり統一した見解があるわけではない。つまり、死後の生があるかどうかは、現時点では明らかになってはいないことである。しかし、本協力者は結論が出ていないことを確信していた。つまり、死後の世界が実際に存在するかどうかは問題なのではなく、死後の生について話しあう中で自ら考えることが重要であることを示しているのではないかと考えた。

3. 看護師の役割

〈死について話す場面がある〉からもわかるように、老年者は死について語る場面があることが明らかとなった。しかし本協力者は、機会があるだけでは不十分だと考えていた。〈学習内容の検討〉や〈アドバイザーが必要である〉〈ガイドブックがあるとよい〉などからもわかるように、方向づけの必要性を強調していた。また、〈同世代同士の共有〉から同世代同士が死について話し合う内容を共有することを大切にすることが示されていた。よって看護師は導入のための方向づけのみで、どのような情報が共有されるのかなどの話し合いの内容については、見守る姿勢が必要であることが示唆された。

V. まとめ

本協力者の語りから、以下のことが明らかとなった。

- ・《人生課題に対する考え (4)》《死後の生に対する考え (3)》《死について話し合う経験 (4)》《死に対する学習の意義 (2)》《死を学習する際のポイント (6)》の5つのカテゴリーが抽出された。
- ・死について考えるときには、死についてのみ考えるのではなく自らの人生課題についても考える必要があることを示唆していた。
- ・自らの経験をもとに、老年者同士が死について話し合いをすることで他者の経験がわかり、学習の機会が広がることが示唆された。
- ・死後の世界が実際に存在するかどうかは問題なのではなく、死後の生について話しあう中で自ら考えることが重要であることを示していた。
- ・死を学習する際のポイントとして看護師は導入のための方向づけのみで、どのような情報が共有されるのかなどの話し合いの内容については、見守る姿勢が必要であることが示唆された。

文献

- 1) アルフォンス・デーケン；〈叢書〉死への準備教育 第1巻 死を教える、メヂカルフレンド社、1998
- 2) 日野原重明・山本俊一；死から生の意味を考える 死生学、技術出版、1988

- 3) 柏木哲夫；死を学ぶ 最期の日々を輝いて、有斐閣、1995
- 4) 山本俊一；死生学のすすめ、医学書院、1992
- 5) 日本看護協会；平成14年度版看護白書、日本看護協会出版会、2002
- 6) 高岡哲子・紺谷英司・深澤圭子；高齢者の死生観に関する過去10年間の文献検討 死の準備教育確立に向けての試み 名寄市立大学紀要、3、49-58、2009
- 7) 田中愛子・岩本晋；老年期に焦点を当てた死生観・終末期医療に関する意識調査、山口県立大学看護学部紀要、(6)、119-125、2002
- 8) アルフォンス・デーケン；死とどう向き合うか、日本放送出版協会、1999
- 9) 石井京子・上原ます子；高齢者の死の準備状態に関する研究、ヒューマン・ケア研究、(3)、1-10、2002
- 10) Ayako Hattiru・Yuichi Masuda・Michael D Fetters 他2005；Aqualitative Exploretion of Elderly Patients'Preferences for End-of-Life Care, Japan Medical Association Journal, 48 (8), 388-397, 2005
- 11) 平川仁尚・益田雄一郎・葛谷雅文 他；終末期ケアの場所および事前の意思表示に関する中・高年者の希望に関する調査、ホスピスケアと在宅ケア、38 (3)、201-205、2006
- 12) 木内千晶・吉田千鶴子；高齢者の希望する終末期の迎え方、岩手県立大学看護学部紀要、6、77-82、2004
- 13) 奥祥子；高齢者の生と死に関する意識、鹿大医短紀要 (9)、1-5、1999